

淡い和毛にも視線を向け、幼い顔をしていても生えてんだな、と思う。冷静に思い返せば高校生なのだから生えてなければかなり問題なのだが、そのときは素直に、そう思った。

「み、見ないでください……っ」

「無茶言うな」

顔だけでなく、全身が羞恥で赤く染まる彼は、どうしようもなく魅惑的で、性的で、美味そうだった。

「ひっ」

静雄に比べれば幼い性器に触れる。傷つけないように、柔らかく、そつと。グロテスクと言えばグロテスクだが、自分のそれに比べれば可愛いものだ。抵抗感はなかった。

自分にも存在する器官だから、どうすればいいのかと悩むこともない。女を抱くよりもよほど簡単かもしれないかった。陰茎をさすって擦って、玉を揉み拉く。それだけで帝人はあられもない声を響かせた。

「や……っ、やめ、やだ、——ン、や……っ」

「嘘っけ」

くく、と喉が鳴る。本当にやめて欲しいと願う声とは思えないほど、それは甘く響く。

「や、もう……っ、駄目、駄目です、出る、でちゃう、から……っ」

「出せばいいだろ」

自分の手で彼が吐精する様が見たかった。程なく、その願いは叶うことになる。

帝人はぶるりと大きく身体を震わせ、静雄の掌を汚した。量は多いように思える。年頃なのに、あまり自慰をしないのかもしれない。汚れた自分の手を見つめ、深く考えず、ちろ、と付着した彼の精液を舐めてみる。美味くはないが、彼の味だ、と思えば奇妙な満足感が広がった。

「……っ、なな何、何してっ」

狼狽する帝人に、微笑を向ける。可愛い。愛しい。もつと欲しい。もつと、もつと、もつと。それは際限がなかった。

「や、……やだっ……！」

帝人なりに精一杯力を込めているのだろう両足を、あまり苦勞なく大きく開かせる。静雄の興味は彼の性器からその奥に潜んでいる窪みに変化していた。

帝人は男で、だから女性器は存在しない。あまりにも当然の事実。けれど代用の術はある。ただ頭で理解しているだけの知識だったが、それで十分だった。臀部を撫で、それから目的の箇所へと探して指で探る。見つけるのに苦勞はなかった。

触れてみると、その場所はあまりにも狭く、静雄を拒むかのようなだ。けれど幸いなことに今、静雄の指は彼のそれで濡れている。ぐい、と多少強引に押し進めれば、濡れた指が進入に成功する。

「痛っ、……嫌、やです、……や……っ」

最初是一本。すべてを埋め込み、蠢かせる。無理矢理馴染ませて、頃合いを見計らって本数を増やした。